＜資料＞

都市部周辺地域における高齢者の終活像
ー大磯町アンケート調査自由記述の分析よりー

横浜国立大学大学院　環境情報研究院
木村　由香
相模女子大学　人間社会学部
松﨑吉之助
横浜国立大学大学院　環境情報研究院
安藤　孝敏

The Image of SHU-KATSU for The Elderly in Peri-urban Areas–An Analysis of Open Statements in A Questionnaire Survey in Oiso Town

Yuka KIMURA
Yokohama National University

Kichinosuke MATSUZAKI
Sagami Women's University

Takatoshi ANDO
Yokohama National University

要旨

本研究では、都市部周辺地域に位置する神奈川県大磯町が 55 歳以上を対象に行った終活アンケート調査の自由記述について内容を分析し、従来の都市部を対象とした先行研究と比較することで、都市部周辺地域の一例として、大磯町高齢者が抱いている終活についての考えや実態について傾向と特徴を明らかとすることを目的とした。アンケート 898 件のうち、分析対象は 236 件であった。オープンコーディングにより、「終活の具体的内容」「終活への姿勢」「終活の動機」「現在抱いている不安」「要望・困っていること」という 5 つのカテゴリが得られた。終活において「物の整理」と「財産整理」といった「整理」に関することが重視され、健康管理にも取り組みたいと考えられていた。「終活への姿勢」では、「ポジティブ」「ネガティブ」「ニュートラル」の 3 つのサブカテゴリが得られ、「ポジティブ」では「整理」を中心とした具体的な内容が共に語られる事が多く、「ニュートラル」では「迷惑をかけない」という動機に対し「財産管理」が比較的強く共起し、「ネガティブ」においては「家族に伝達・相談」での共起が比較的強く、「独居生活」と「健康」についての不安が語られがちであった。また終活への姿勢によらずこれからの生活への知識不足、備える必要性を感じていることが明らかとなった。

Abstract

In this study, we analyzed the free text of a questionnaire survey on life after death conducted in Oiso Town, Kanagawa Prefecture, which is located in a peri-urban area, for people aged 55 and over, and compared it with previous studies on urban areas. The purpose of this study is to clarify the tendency and characteristics of the thoughts and actual conditions of SHU-KATSU by the elderly people in Oiso-cho as an example of a peri-urban area.

Of the 898 questionnaires, 236 answers were analyzed for free answers. From the analysis by open coding, five categories were obtained: "specific contents of SHU-KATSU," "attitude toward SHU-KATSU," "motivation for SHU-KATSU," "current concerns," and "requests and problems”. In SHU-KATSU, "organizing things" and "organizing assets" were emphasized, and people also wanted to take care of their health. "Three subcategories of "positive," "negative," and "neutral" were obtained for the "attitude toward SHU-KATSU." In the "positive" category, specific details centered on "organizing" was often mentioned together, while in the "neutral" category, "organizing assets" was relatively strongly associated with the motive of "not causing trouble”. In the "negative" category, the motive of "communicating or consulting with family" was relatively strong, and the respondents tended to talk about their concerns about "living alone" and "health". In addition, regardless of their attitudes toward SHU-KATSU activities, the respondents felt a lack of knowledge and a need to prepare for their future lives.

1 研究背景

終活とは、高齢者が比較的健康なうちに、自らの老いや死、そして死後について何かしらの備えを行うことを指す。具体的には、葬儀や墓、医療や介護についての希望、財産整理や任意後見といった事柄から、物の整理、自分史の作成といった、実に様々な内容が含まれている（木村・安藤，2018）。終活に関連する団体や企業によれば、「人生の終焉を考えることを通じて、自分をみつめ、今をより良く自分らしく生きる活動」（終活カウンセラー協会，2021）のように、サクセスフル・エイジングを目指す意味を含んだものともされ、死に備えるということではなくむしろ、死を意識しつつこれからの人生をどうしていくかといった意味合いを多分に含んでいる。

終活という現象について取り上げた研究は、現状ではまだ数は少ない。木村・安藤（2015）は、終活に関する項目について準備の内容を書き込む「エンディングノート」への取り組みから、終活に取り組む高齢者は「迷惑をかけたくない」という意識が強く、物の整理や預金・保険など財産の整理が取り組みやすく満足感を得られやすい内容であったことを明らかとしている。また、岡本ら（2017）は、高齢者の死生観と終活の現状について都市と地方の比較を行い、都市部の高齢者のほうが終活により積極的である一方、都市・地方双方とも終活に関する情報を得る場についての認知度が低いことを示した。同じく木村・安藤（2019）は、首都圏都市部における終活と高齢者の生活満足度との関連を調査し、終活は特に独居高齢者の生活満足度や未来展望について影響を及ぼし、サクセスフル・エイジングにつながる人生の設計に寄与するものである可能性を見出した。また、木村（2020）は、首都圏都市部在住高齢者へのインタビュー調査から、サクセスフル・エイジングにつながる終活とするためには、終活講座など知識を得られる場は終活に取り組み継続する機会となること、財産整理や物の片付けを最初のステップとして終活の促進を図ることが効果的であること、また健康管理・維持についても終活の一環と捉える声が見られたことを示した。さらに、木村・安藤（2020）による新聞記事からの終活像の分析では、近年、終活の話題が葬儀や墓といった内容から相続についてシフトしていること、そして高齢者自身は物の整理など日常生活に即した形で終活を捉えていることを明らかとした。

人生 100 年時代を迎えた現代日本の超高齢社会においては、この終活が様々に展開される動きが見られている。市場での終活に関する様々な商品・サービスの展開だけでなく、経済産業省（2011；2012）といった国レベルから神奈川県横須賀市（2021）・大和市（2021）、千葉県千葉市（2021）、愛知県北名古屋市（2021）、兵庫県高砂市（2021）などをはじめとする自治体レベルまで、行政での取り組みも広まっている。なかでも、神奈川県大磯町では、町民の生活を充実させるための方針の一つとして終活が取り上げられ、取り組みが進められている。大磯町は、神奈川県中郡にある基礎自治体で、2021 年 8 月 1 日現在、人口は 31,598 人、世帯数 12,793 戸（大磯町，2021）、都心部から 60km 圏に位置する、いわゆる都市部周辺地域である。町の南部は太平洋に面しており、明治 18 年日本初の海水浴場が開設された地域である。また財政界の重鎮をはじめとする別荘が数多く建築され保養地として発展した背景をもつ大磯町は、首都圏都市部周辺に位置する温暖な地域である。

同町では、施政方針において、2019 年度から毎年、終活支援への取り組みが謳われてきた。「高齢世代の皆さんが、自分自身の身の回りのことを生前にケアし、自分らしく充実した人生を送るための終活支援」（大磯町，2021）の体制を充実させることで、地域福祉を充実させることを意図している。このような方針から、同町は 2019 年度、大磯町在住の 65 歳以上高齢者層及び 55 歳から 64 歳の壮年層町民を対象としたアンケート調査に置いて、終活に関する内容が組み込まれた（大磯町，2020）。同アンケートの配布数は 2,000 票、回収数は 898 票（回答率 44.9%）であった。結果、終活という言葉の認知度は実に 9 割以上（「知っている」78.8%、「聞いたことがある」13.4%）であり、終活はもはや広く知られる言葉であることがうかがえる。また、

実行中または実行予定の終活の内容としては、「荷物の整理」(35.4%) や、「老後の生活について」(26.1%) といった項目が多い。また終活を行う（行いたい）理由については「家族に迷惑をかけたくない」が 45.5%となっていた。

これらの結果は、前述の先行研究とも一致する傾向にある。生活に即した事柄から終活をとらえるといった視点が、大磯町という都市周辺地域においてもまた、当事者たる高齢者層では根強いことが改めてうかがえる。

1.1 研究の目的

大磯町で行われた終活のアンケート結果からは、家族に迷惑をかけたくないという動機があること、および終活においては物の整理に取り組む傾向が強いことが明らかとなり、これまでの先行研究の知見（木村・安藤 2015; 木村・安藤 2019）と一致していた。先行研究では、主に東京都・神奈川県を中心とする都市部在住の高齢者を対象とした調査であったことから、都市部以外の傾向をうかがい知るまでには至ってはいなかった。一方大磯町は、首都圏都市部に近いとはいえ、これまでの調査対象であった都市部からは距離があり、その周辺地域に位置する町となる。これまでの調査対象であった都市部に見られた傾向について、その地域を拡大した形で、改めて確認できたことになる。

ところで、同アンケートの最終設問においては、自由記述が設定されていた。自由記述については、大磯町の報告書でも参考程度にわずかに触れられているのみで、詳細な分析はなされていない。だが、自由記述にはアンケート回答者が終活から連想する様々な内容が記されており、選択肢式回答からだけでは明らかにならない部分も含まれている可能性がある。自由記述を分析することで、終活当事者たる高齢者と終活についてよりリアルに知ることができると考える。よって本研究では、終活アンケート自由記述内容のカテゴリー分けを行い、大磯町在住高齢者について、1) 終活像は全体的にどのような傾向にあるのか（どのような終活についての記述が多く見られるのか)、2) 終活に対して抱いている好意的・否定的といった印象の違いによって記述内容の傾向に違いはあるのかを明らかとし、さらに都市部在住高齢者を対象とした先行研究と比較する。これらを通して、都市部周辺地域の一例として、大磯町在住の高齢者が抱いている終活についての考えや実態についての傾向と特徴の把握を行い、知見を深めることを試みた。

2 方法

2.1 分析対象

大磯町が 2019 年 12 月に行った終活についてのアンケート調査回答者は、A：介護認定のない 65 歳以上一般高齢者（配布：1200 通／回収：599 ／回収率：49.9%)、B：55 ～ 64 歳壮年層（配布：400 ／回収：139 ／回収率：34.8%)、C：在宅で要支援・要介護認定を受けている 65 歳以上高齢者（配布：400 ／回収 142 ／回収率：35.5%）の区分にて無作為抽出によって実施された。回収された 898 票のうち、アンケート最後の設問「最後に、「終活」に対してあなたが思っていることについて自由にご記入お願いします。」とした自由記述欄に記入のあった回答は 250 件であったが、判読不明なものや、明らかに関連しない内容（アンケートへのねぎらいコメント等)、代筆者が自分についてコメントしているものなどを除き、最終的に 235 件を分析対象とした（表 1)。

なお、終活についてのアンケートの設問には、自由記述の他に、性別、年齢、同居人、終活の認知度、終活の実施状況等の終活関連項目となっている。ただし、終活の実施状況を始めとする、終活に関連する項目については、それぞれの設問において無回答や一部回答となっているものも多いため、今回の研究では主に自由記述の内容のみに着目した分析を中心とした。

2.2 分析方法

自由記述の分析は、オープン・コーディングによる定性的手法を用いた。オープン・コーディングは、具体的なテキストを抽象的な概念に置き換えていく作業を指し、基礎的なコーディングのための方法（分析法）である（サトウら，

表 1　対象者属性

年齢	平均	74.1±10.1
	中央値	74
性別	男性	119 (50.6%)
	女性	116 (49.4%)
同居人	あり	208 (88.5%)
	なし	27 (11.5%)
終活の実施状況	行っている	50 (21.3%)
	これから行う予定	98 (41.3%)
	行う予定はない	37 (15.7%)
	無回答	51 (21.7%)

2019)。オープンコーディングは、あらかじめ設定した概念に具体的なテキストを当てはめる演繹的方法と、具体的なテキストに基づいて類似していると思われるものを集め、概念を作っていく帰納的方法とがある。本研究では、自由記述の傾向を探索的に分析することを目的とすることから、後者の帰納的方法に基づきコーディングを施し、それらを意味ごとにカテゴライズして概念を抽出した。なお、コーディングおよびコードの集計・分析処理には MAXQDA 2020 を使用した。

自由記述は対象者ごとの平均が 82.4 文字と比較的短文であるため、オープン・コーディングにおいては対象者の発言を 1 つのセグメントとして扱った。手順としては、①セグメントごとに文章にコーディングを施し構成概念を抽出、②各構成概念を意味のまとまりごとに分類しカテゴリを生成し、集計を行った。

3 結果

コーディングによって得られた結果を、表 2 に示す。得られたコードの種類は 42 件、コードの頻度合計は 402 件であった。それぞれのコードは、さらに意味のまとまりごとにカテゴリ分けを行い、最終的に「終活の具体的内容」「終活への姿勢」「終活の動機」「現在抱いている不安」「要望・困っていること」の 5 つのカテゴリを得た。表 2 では、太字にて示したものがカテゴリとなっている。

「終活の具体的内容」では、終活に関連する様々な具体的な内容について述べられているものを集約した。なお、ここでは「身辺整理」というコードが得られているが、これはお金や物品に限らず、「身辺をすっきりさせる」、また「届け出など」といった大まかな内容となっている。類似したものに「物の整理」「財産整理」があるが、いずれにも分類が難しいものを「身辺整理」コードとした。

「終活への姿勢」では、終活についてどのような感想を抱いているのか述べられているものを集約することができた。そのためこのカテゴリのみ、「ポジティブ」「ネガティブ」「ニュートラル」の 3 つのサブカテゴリにさらに分類を施した。

「終活の動機」については、終活を行う意図についてどのように考えているかが述べられているものを集約した。なお、終活に実際に取り組んでいるかどうかとは必ずしも一致していない。

また、アンケート自由記述においては、終活そのものについて述べられてものだけでなく、終活アンケートに回答することを通して現在の生活を振り返り述べられている内容が見受けられた。そのため、終活に関連することとしての言及ではないものの、現在の生活において「現在抱いている不安」「要望・困っていること」として分類される発言がまとまって見られた。

3.1 上位カテゴリの内容について

3.1.1 終活の具体的内容

「終活の具体的内容」においては、「物の整理」「財産整理」が共に頻度 20 と多く見られている。

表 2　コード・カテゴリー一覧

コード	頻度
終活の具体的内容	**127**
物の整理	20
財産整理	20
健康管理	15
医療・介護の意思決定	14
社会との関わり	11
身辺整理	9
葬式	9
日々の生活の充実	8
家族に伝達・相談	8
お墓	7
エンディングノート等	5
後見人	1
終活への姿勢	**167**
ポジティブ	**49**
今後進めたい考え	16
なかなか進まないが取り組みたい	14
必要性を認識	13
終活に対する明るい印象	6
ネガティブ	**57**
考えていない	33
終活という言葉が良くない	4
取り組む時間・余裕がない	20
ニュートラル	**61**
日々の充実を重視	38
自然体がいい	12
老い・死を意識はする	9
終活の意味がよくわからない	2

コード	頻度
終活の動機	**51**
迷惑をかけない	31
自分のことは自分で	14
自分らしく生きる	6
現在抱いている不安	**31**
独居生活	6
医療・介護	6
家族の今後	5
お金	3
健康	3
社会に関すること	3
移動手段	2
色々	1
希望通りになるかどうか	1
墓守り	1
要望・困っていること	**26**
終活の情報・相談先が欲しい	17
行政の関与不要	4
行政の移動支援	2
人と話す場所が欲しい	1
家族と意見が合わない	1
政治の充実	1

また、前述のように「身辺整理」のような広義の内容も一部これらに含まれるものと考えられる。「物の整理」では「自分の身のまわりの品々を少なくし、何がどこにあるのか分かる様に早くしといて、余分なものがない様にする（65 歳・女性）」のように、生活をシンプルにし自分の物・洋服などを処分していくことについて述べられている。「財産整理」では、「子供達に迷惑を掛けない程度の財産を維持（71 歳・男性）」から「遺産相続についての考えを公正証書にした（60 歳・男性）」のように、日々のお金の使い方から相続に至るまで、現時点で次の世代に残ると考えられるお金や不動産についての事柄が述べられている。また、日々の「健康管理」は終活の具体的内容というよりは今後取り組みたい内容と言えるが、「最近“終活”とても気になるようになりました。一番の希望は、子供達に迷惑かけず、ピン・コロを望んでいます（61 歳・男性）」のように、終活の一環として捉える記述も見られた。

ついで、「医療・介護の意志決定」として、延命治療に関してや、介護が必要になったら老人ホームに入る、などといった内容や希望が述べられていた。さらに「社会との関わり」として、「最後まで、社会、地域との関りを続けたい（73 歳・女性）」といったものや、「仕事やボランティアでまだまだ活躍の場を考え、準備もしているので、その目標にそって整理片付けはしたいとおもっている（73 歳・女性）」など、ボランティア活動や仕事を続け何かしら役に立ちたいという内容・希望が見られた。

3.1.2 終活の動機

終活の動機については、「子供達に負担をかけたくないと思っています（70 歳・女性）」「自分の為の終活と言うより、残された家族の負担にならないようにというのが 1 番の目的です（58 歳・男性）」のように、子供や家族、あるいは周囲の人や社会に負担がかからないように、との

意見が圧倒的に多く見られた。「自分のことは自分で」においては、「最後（期）は、自分で決めた通りに終わりたい」といった意志が語られるものとなったが、子どもについて「最終的には世話になることでしょう。それまでは自分の事は自分で考えて生活していきたい（76 歳・男性）」と、周囲に面倒をかけないための意図が見られる記述も見られている。

3.1.3 現在抱いている不安

現在抱いている不安については、総数 31 とそれほど多くはないが、「独居生活」「医療・介護」がそれぞれ 6 件であった。「独居生活」を上げた対象者の属性を見ると、いずれも現在一人暮らしではなく同居人がいるとの結果であったが、「相手がいなくなった時の不安（57 歳・女性）」のように、今後のことを考えての内容であることが伺えた。また、「医療・介護」については、動けなくなったときのこと、認知症のことなどについてどうすればよいのかといった内容となった。次いで「自分が死んでも、残っている人が（配偶者・子供達が）充分な生活が出来るかが心配だ（77 歳・女性）」のように、自らがこの世を去った後について「家族の今後」を心配する声が見られた。

3.1.4 要望・困っていること

「要望・困っていること」では、本アンケートが行政によるものであることから、行政に対する要望も含まれた。このようなものが欲しいなどの具体的な事柄について集約したものである。「終活の相談出来る窓口が必要かと思います（84 歳・女性）」や、「具体的にどこから手をつければいいのかよくわかりません（74 歳・男性）」のように、終活をすすめるに当たり情報が必要との意見が見られている。

3.2「終活への姿勢」における 3 つの姿勢と、他のコードとの関連

「終活への姿勢」では、前述の通り、終活についてどのような感想を抱いているのかについて得られたコードを、「ポジティブ」「ネガティブ」「ニュートラル」の 3 つのサブカテゴリに分類している。

「ポジティブ」については、「『自分の終活』について、考えを深めて行きたい（87 歳・男性）」「元気なうちに、少しづつ行いたいと思っています（60 歳・男性）」「終活を行うことで自分の状況を落ち着いて把握できて良いと思います（69 歳・女性）」「身体が動くうち、認知面が低下しないうちに実施すべき事項（75 歳・男性）」のように、終活を進めている、進めたい、あるいは必要性を感じているなどのポジティブな評価、姿勢について集約した。

反面「ネガティブ」では、「70 才は言った私ですが今の所無望ながら、ノンビリ、それなりに生活しているので、全く考えていません（77 歳・女性）」「先にお墓に入いるので後の事は生きている者がやると思います（80 歳・男性）」「日々の暮しに忙しく終活について考えている時間がありません（75 歳・男性）」のように、考えていない、必要ない、できない、といった内容が含まれる。また、「『終活』と言う言葉はきらいです。これから終わりの人生を歩んでいくようでいやだ（92 歳・男性）」のような、終活に対する暗い印象といった内容について集約した。

最後に「ニュートラル」では、」「自然体に（65 歳・男性）」「あまり大げさに考えず、自分の意志を大切にしたいです（90 歳・男性）」「ブームに惑わされず、自分のペースで自分を見つめる（74 歳・女性）のように、終活についてあまり意識しすぎないこと、終活にこだわりすぎず日々の生活を重視するなどといった中立的なコメントを集約した。

これら「ポジティブ」「ネガティブ」「ニュートラル」な内容を含む自由記述では、他にどのような内容が語られているのか、姿勢ごとの特徴を探るべく、さらに分析を行うこととした。ここでは、「ポジティブ」「ネガティブ」「ニュートラル」のカテゴリと、他の「終活の具体的内容」「終活の動機」「現在抱いている不安」「要望・困っていること」カテゴリに属する他のコードとの共起関係を MAXQDA の共起分析を用い、ネットワー

ク図を生成した（図１）。なお、図の共起関係の強さは線の太さによって示されており、線の長さや位置は意味を持たない。

この図から、「ポジティブ」においては、物の整理を中心として終活についての具体的な内容が語られがちであった。「ニュートラル」では「迷惑をかけない」という動機が多く語られると同時に、それに付随して「財産管理」が比較的強く共起していた。また「ニュートラル」においては、「自分のことは自分で」「自分らしく生きる」といった、他の動機も共起関係にあった。「ネガティブ」においては、「家族に伝達・相談」での共起が比較的強く見られるとともに、「独居生活」と「健康」についての不安が語られがちであった。

さらに、「ポジティブ」「ニュートラル」「ネガティブ」に共通して「迷惑をかけない」という動機、そして「健康管理」について今後取り組みたい様子が現れた。さらに、「ポジティブ」「ネガティブ」という相反する姿勢において、前述の２つのコードに加え、「家族に伝達・相談」及び「終活の情報・相談先が欲しい」が共通していた。また、「ニュートラル」「ネガティブ」に共通するコードとして「健康」「社会との関わり」が見られている。

4 考察

4.1「整理」をキーワードとした終活の内容

今回の自由記述分析においては、「物の整理」及び「財産整理」が各 20 件、さらにこれら 2 つのコードの意味合いが含まれる「身辺整理」が 9 件であった。これら 3 つのコード合計は 49 件、全 402 件中 12.2% と、一定以上の割合を「整理」に関するコードが占めていた。このように、「物の整理」「財産整理」が重視されることは、こ

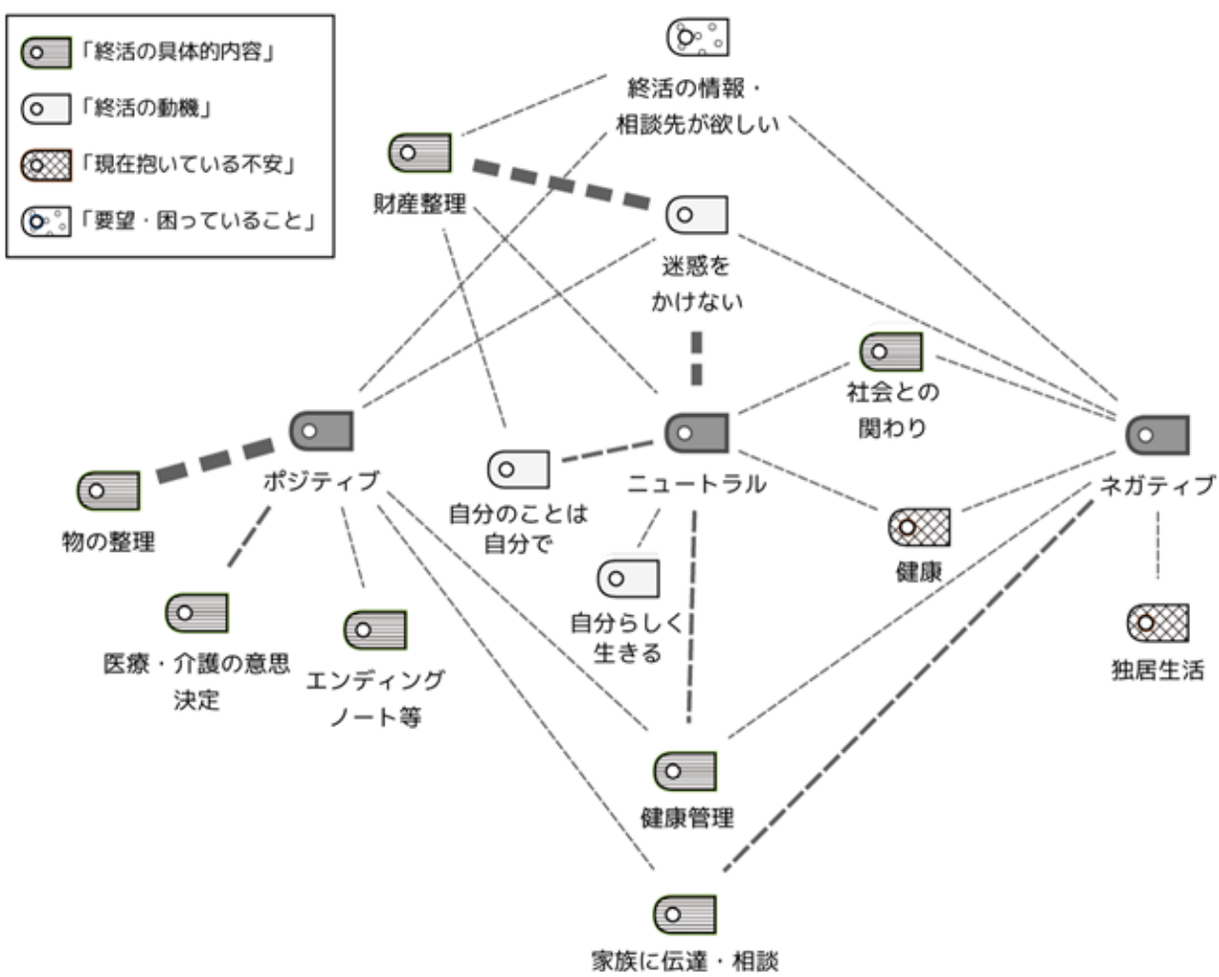

図１　「終活への姿勢」と他のコードとの共起関係

れまでの先行研究（木村・安藤， 2015; 2019; 2020)とも一致する内容である。これは､アンケート調査での自由記述以外の部分でも確認されていたことだが、自由記述においても改めて示されていることから、改めて、終活の入り口に「整理」というキーワードが大きな役割を持つことが確かめられた。さらに、本研究の特徴として、対象地域があった。これまでの高齢者を対象とする先行研究の対象は、主に首都圏やその周辺を中心とする都市部を対象としたものが中心であった。一方今回の調査対象は、人口 3 万人かつ都心から 60㎞ 圏に位置する町である大磯町となっている。この大磯町という条件でも同様の結果が自由記述からも得られたことは、都市部を中心としたこれまでの研究成果の適用範囲をさらに押し広げるものとして考えうることとなり、新たな成果と言える。

「物の整理」と「財産整理」のコードが同数となったことも本研究では特徴的な点であると考える。先にも述べたように、新聞記事分析による先行研究では、終活について相続等財産に関わる事柄が多くなっていることが指摘されていた。一方、これまでの高齢者を対象とする先行研究では、終活において、物の整理の次に財産に関する内容が多く取り組まれていることが示されていた。今回の分析では、この 2 者が同数にあることから､高齢者において､物も金銭も「整理」していくことが同じく意識され、実行したいと考えられている可能性が見られた。

「迷惑をかけない」という、終活の動機もまた、先行研究では代表的なものとして示されてきたものだが、本研究でも同様の結果となっている。加えて今回の分析では､「財産整理」が比較的強い共起関係にあることが見いだされた。迷惑、面倒、家族のためといった意識が、財産整理につながる。財産整理が高齢者に重要視される理由、その動機について、一つの示唆が得られたと言える。先行研究では、近年開催される終活関連のセミナー広告の多くが、相続等金銭に関するものとなってきていることが明らかとなっている。欧米に比べ遺言書などがそれほど一般的にはない日本においても、今後徐々にニーズが高まっていくかもしれない。

また、こと終活においては、文字通り「終わりを連想させる」という理由からその言葉が嫌だとの意見がままみられており、今回の分析においても 4 件であるが「終活という言葉が良くない」コードに出現している。一方、今回の分析で得られた「整理」や、それに類似して「整える」「整う」などといった言葉は、一般に比較的ポジティブな捉えられ方をしているとも思われ、今後終活において「整理」「整える」「整う」のような言葉がそのイメージを新たとする一助となる可能性が考えられよう。

4.2 終活に関する知識を求める声

今回の分析では、終活に対する姿勢「ポジティブ」「ネガティブ」双方から、「終活の情報・相談先が欲しい」コードと共起していた。終活に対して否定的な発言があっても、知識が現在やこれからの生活に必要だとの考えが一定数見られたと言える。都市・地方双方とも終活に関する情報を得る場についての認知度が低いという先行研究の結果（岡本ら， 2017）に通じるものであった。同時に、終活を始める・進める上で講座のような知識を得られる場が重要であるとの都市部高齢者を対象とした先行研究（木村，2020）にも通じる結果がここでも確かめられたと言える。

大磯町においては、町の施策として終活が謳われて入るものの、都心ほどにはさまざまな終活についての情報を提供する場や、セミナーなどが開催されているわけではない。例えば同じ神奈川県内でも政令指定都市である横浜市では、エンディングノートを区が制作・配布、付随して終活セミナー、エンディングノートセミナーといった終活に関する知識が提供されている。「ポジティブ」「ネガティブ」双方から知識を求める声が見られることから、知識の提供、知識を得る拡充は、終活に対する姿勢がポジティブとなりえる可能性が大きいだろう。よって、終活支援においては、例えば前述の「整理」に関するセミナーを切り口として、徐々に「医療・介護の意思決定」や葬儀・墓といった内容につ

いて、個人個人のニーズに沿って広げていくことが有効な手段ではないだろうか。また、そういった機会を通して、特に終活の姿勢「ニュートラル」から「ネガティブ」において共起していた「社会とのつながり」を広げたり、「家族に伝達・相談」したり、「自分らしく生きる」「日々の生活の充実」につなげていくこともまた可能であると思われる。

4.3「健康」というキーワード

今後取り組みたい事柄では、「健康管理」の声も多かった。また、終活に対する姿勢でも、「ポジティブ」「ネガティブ」「ニュートラル」いずれにおいても、「健康管理」との共起が見られている。このことから、高齢者の生活において、そして終活においても、健康というキーワードを外すことはむしろ不自然であろう。都市部高齢者を対象とした先行研究（木村，2020）においても、運動や健康管理を終活として捉えているというインタビュー結果が見られていた。終活といえば死に備えることというイメージも語られるが、人生を豊かにするためには健康であることがまず大切であるし、また老いを実感する高齢者にとって健康管理は切り離せない事柄でもある。終活の項目に「健康」のキーワードが組み込まれることは、終活のイメージアップにもつながろうし、また迷惑をかけないための終活、というだけではない、ポジティブな動機にもなり得る可能性がここに示唆されていると言える。

5 まとめと今後の課題

本研究では、大磯町において行われた終活アンケートの自由記述を通して、都市部周辺地域に位置する大磯町高齢者層の終活像を明らかとしつつ、さらに都市部在住高齢者を対象とした先行研究と比較した。

本研究で得られた内容として、本研究では、終活への姿勢を「ポジティブ」「ネガティブ」「ニュートラル」に区分し、それらに特徴的な発言を見出すことができた。そのうえで、終活への取り組みで重視されるのは物の整理や財産整理といった「整理」に関する項目であること、終活への姿勢に関わらず高齢者自身が知識不足を感じ求めていること、そして老後の生活や終活においては健康管理が重要との考えがあることが見いだされた。

これらの結果は、これまで首都圏都市部を中心として行われてきた終活についての研究結果に通じるものであり、先行研究で得られた知見について、都市部だけでなくその周辺地域に位置する大磯町についても同様の傾向にあることが明らかとなった。

そのうえで、本研究の分析を通し、終活についての知識を提供する講座のような場を提供すること、および健康への取組を終活に組み込むことが、終活に対するイメージアップにつながり、終活への姿勢がポジティブになり得る可能性を新たに見いだすことができた。

本研究は、大磯町の行ったアンケート自由記述を分析したものである。都市部周辺地域である大磯町においても都市部での結果と同様の傾向が見られたことから、他の都市部周辺地域をはじめ都市部以外の地域についても対象範囲をさらに広げ、比較検討していくことが改めて重要であろう。さらに、本調査及び先行研究で得られた示唆をもとに、都市部や他の都市部周辺地域などで改めて同様の傾向が見られるか否かについて確認することや、より詳細なアンケートやインタビューの実施を行うことで、より深い高齢者の実態を明らかにしていく必要があろう。また、今回はアンケート回答状況の制約から自由記述の内容にのみ着目したが、今後、自由記述分析との関連も含めたアンケート内容の設計から、相互に混合研究を進めていくことで、より明確で階層的な結果が得られるものと思われる。例えば、今回の比較の視点となった地域であったり、性別、年齢、終活についての取組の有無といった内容と、自由記述の内容との比較を行うことも可能と思われる。

得られた示唆をもとに、終活の当事者たる高齢者のための終活という視点に立ち、今後は終活の特徴を明らかとするだけでなく、高齢者の求める知識、終活へのモチベーションを高める

内容について検討していきたい。

謝辞

本研究は、大磯町の協力を受け実施しました。深く感謝申し上げます。

引用文献

1) 岡本美代子・島田広美・齋藤尚子（2017）「都市と地方における高齢者の死生観と終活の現状」『医療看護研究』19，pp.62-69.
2) 北名古屋市（2020）「エンディング（終活）サポート事業」『北名古屋市ホームページ』https://www.city.kitanagoya.lg.jp/fukushi/3000163.php（2021/8/20).
3) 木村由香・安藤孝敏（2015）「エンディングノート作成にみる高齢者の「死の準備行動」」『応用老年学』9(1)，pp.43-54.
4) 木村由香・安藤孝敏（2018）「マス・メディアにおける終活のとらえ方とその変遷―テキストマイニングによる新聞記事の内容分析―」『技術マネジメント研究』17，pp.1-17.
5) 木村由香・安藤孝敏（2019）「独居高齢者における終活への取り組みと生活満足度との関連」『技術マネジメント研究』18，pp.1-17.
6) 木村由香（2020）「高齢者の終活への取り組みとサクセスフル・エイジング」横浜国立大学環境情報学府博士論文
7) 木村由香・安藤孝敏（2020）「マス・メディアにみる終活のとらえ方とその変遷―朝日・読売・毎日新聞のテキストマイニング分析を通して」『技術マネジメント研究』20，pp.1-19 .
8) 経済産業省（2011）『安心と信頼のある「ライフエンディング・ステージ」の創出に向けて報告書』https://www.asagao.or.jp/sougi/link/keisan-houkoku.pdf（2020/8/20).
9) 経済産業省（2012）『安心と信頼のある「ライフエンディング・ステージ」の創出に向けた普及啓発に関する研究会　報告書』https://www.shukatsu-csl.jp/about_shukatsu（2020/8/20).
10) サトウタツヤ・春日秀朗・神崎真実 編（2019）『質的方法マッピング』新曜社
11) 終活カウンセラー協会（2021）「終活とは」『終活カウンセラー協会ホームページ』https://www.shukatsu-csl.jp/about_shukatsu（2021/8/20).
12) 高砂市（2020）「エンディングプラン・サポート事業」『高砂市ホームページ』https://www.city.takasago.lg.jp/gyoseisite/kenko_fukushi/sonohokafukushi/4121.html
13) 千葉市（2021）「エンディングサポート（終活支援）事業」『千葉市ホームページ』https://www.city.chiba.jp/hokenfukushi/kenkofukushi/hokatsucare/endingsupport.html（2020/8/20).
14) 大和市（2021）「おひとり様などの終活支援事業」『大和市ホームページ』http://www.city.yamato.lg.jp/web/f-soumu/f-soumu01211702.html（2020/8/20).
15) 横須賀市（2021）「終活支援センター」『横須賀市ホームページ』https://www.city.yokosuka.kanagawa.jp/3014/syuukatusien/index.html（2020/8/20).